

## 「からし種の木」

マルコの福音書 4:30～34

### はじめに

種を用いたイエシュアのたとえ話の中から、今日は「からし種」のたとえを取りあげ、その指し示す意味について考えてみたいと思います。しかしこのたとえが何を指し示したものであるのかは、イエシュアご自身がたとえを語られる前にはっきりとこう述べておられます。

#### 【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:30 またイエスは言われた。「神の国はどのようにたとえたらよいでしょうか。どんなたとえで説明できるでしょうか。」

イエシュアという御方は、ただひたすらにこの「神の国」について説き、証しし、表し、教え、また宣べ伝えた御方です。では「神の国」とは何か。「神の国」とは一体何でしょうか。これをどう捉えるか、どう理解するかが、イエシュアという御方の存在と、その目的を理解することに繋がり、そして果てはこのイエシュアが父と呼ばれる天におられる神と、その御言葉である聖書の全体を理解することにも繋がってくると思います。「神の国」はヘブル語では「マルフォト(מַלְכוּת) ハーエローヒーム(הַאֱלֹהִים)」と言います。イエシュアはイスラエルの民、ユダヤ人としてお生まれになり、同じくユダヤ人である弟子たち、また群衆に対して、彼らの言語であるこのヘブル語を用いて「神の国」について語られたのです。エローヒームとは「神」、そしてマルフォトは「王国」という意味です。ですから「神の国」は正確には「神の王国」ということです。ではこの「王国」とはどのようなものか、マルフォトという言葉の最初の言及を見てみますと、

#### 【新改訳 2017】 民数記

24:5 なんとすばらしいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は、イスラエルよ、あなたの住まいは、

24:6 それは、広がる谷のよう、また川のほとりの園のようだ。【主】が植えたアロエのよう、また水辺の杉の木のようにだ。

24:7 その手桶からは水があふれ、種は豊かな水に潤う。王はアガグよりも高くなり、王国は高く上げられる。

これはバラムの語った「ヤコブ」すなわち「イスラエル」の民に対する預言の言葉です。彼は異教の占い師でしたが、神の霊によってこれらの言葉を語りました。そしてその「王国は高く上げられる」と語り、ここに聖書で最初のマルフォトがあります。このようにマルフォトとは本来、イスラエルの民を指し示した言葉であると言えます。そしてそのイスラエルの「王はアガグよりも高くなり」ともありますが、この王とはもちろんメシアであるイエシュアのことであり、そして「アガグ(אֲגָג)」とはイスラエルの敵を象徴する名であると考えられます。実際にエステル記でイスラエルの民、ユダヤ人を絶滅させ

ようとした人物に「アガグ人」ハマンという人がいます（エステル記 3:1）。またそれはエゼキエル書 38 章で預言されている「多くの年月の後」すなわち終わりの日にイスラエルを侵略しようとする「ゴグ (גוג)」の語源であるとも考えられ、そして究極的には黙示録 13 章に記された「獣」と呼ばれる反キリストを指し示した名であると考えられます。イエシュアはこの「獣」を打ち滅ぼし、イスラエルの王となられ、そしてその「王国は高く上げられる」すなわち「神の国」となる、という神のご計画がこのマルフォートという言葉に本来指し示された意味、神のご計画であると考えられます。「国」という言葉は日本やアメリカ、ロシアなど様々な場所や民族を指し示しますが、このようにマルフォートとは本来、イスラエルの民を限定して指し示し、それに対する神のご計画を表す言葉であったとすることができます。

そしてイエシュアはここでこの「神の国」を「たとえで説明」すると言われています。この「たとえ」を語ることをヘブル語でマーシャル(משל)と言いますが、この動詞は本来、創世記 1:18 にその由来を持ち、本来の意味はこれとは全く異なり、「司る、支配する、統治する」という意味で用いられた言葉です。

#### 【新改訳 2017】創世記

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

1:18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。神はそれを良しと見られた。

これは神の天地創造の御業の第四日、一般的には太陽と月が創造されたとされている箇所ですが、ここで「昼と夜を治めさせ」と訳されているのが聖書で最初のマーシャルです。そしてそれは「光と闇を分ける」ためであったとあり、「たとえ」と訳されたマーシャルですが、本来は明確な区別をつけること、裁くことを意味する言葉であると考えられます。一般的なたとえ話は、物事の道理や教えなどを解りやすくするために用いるものなのですが、イエシュアはこれを「分ける、裁く」という意味で用いられたのです。それは以下のように語られているとおりです。

#### 【新改訳 2017】マルコの福音書

4:11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。

4:12 それはこうあるからです。『彼らは、見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない。彼らが立ち返って赦されることのないように。』

このように、イエシュアの弟子たち、すなわちイエシュアを信じ、その御言葉を受け入れる者には「神の国の奥義」、つまり「神の国」がどのようなものであるかということが知らされ、そこに入ることができのですが、イエシュアを信じない者、受け入れない者には「神の国」に入れないことはもちろん、それが何であるのかさえも知ることができないということであり、つまりイエシュアの「たとえ」、マー

シャルとは、イエシュアによって救われる者と滅びる者とを分ける、裁くことを意味するものであると考えられます。ですからイエシュアの語られた「たとえ」の意味を知ること、解き明かしていただくことは「神の国」に入る者、救われる者にとっての証し、しるしと言えるのです。では次に語られている「たとえ」とその解き明かし、すなわち「神の国の奥義」を受け入れてまいりましょう。

## 1. からし種

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:31 それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときは、地の上のどんな種よりも小さいのですが、

4:32 蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張って、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」

「からし種」は、アブラナ科のカラシナ（芥子菜）の種子で、その名からもわかるとおり、辛子、マスタードの原料として有名です。しかしガリラヤ湖周辺に生えていたカラシナは、大して美しい花が咲くわけでも、良い香りがするわけでもない、当時はいわゆる雑草と呼ばれる類のものとして扱われていました。たしかにその種は 0.5mm 程度と小さいのですが、実際のカラシナの木は成長してもそれほど大きくはならず、せいぜい 150 cm 程度にしかなりません。右の写真を見ればわかるように、まさに雑草といった見ばえで、おおよそ樹木とは呼べないような姿をしています。しかしイエシュアはそんなカラシナの木が「生長してど



んな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張って、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」と言われました。そんなことは普通の常識ではあり得ないことでした。つまりイエシュアはこのたとえを通して、常識ではあり得ないような、考えられないような奇蹟が、神の御業が起こることについて述べておられたのです。それはすなわち、たった一人の人から、世界で最も偉大な民族、国が起こされるという出来事であり、具体的には、神がアブラムに約束されたご計画が成就することを指し示していたと考えられます。

【新改訳 2017】創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

アブラム、すなわちアブラハムは、自分が生まれ育った土地からも、親族からも離れ、まさにたった一粒の種のような存在になりました。しかしそんな彼を、神は地上で最も「大いなる国民」とすることを約束されました。この約束の成就、神のご計画の完成が「からし種」のたとえに込められた意味であり、「神の国」とは、アブラハムの子孫であるイスラエルの民によって「地のすべての部族」が祝福される世界であることが指し示されていると考えられます。



ちなみにこの事実は、イスラエルという名前の中にも表されています。イスラエルの頭文字ヨッド(י)はヘブル文字の中で最も小さい、種のような文字で、逆に最後の文字ラーメッド(ל)は最も大きく、また権威を表す杖を象った文字なのです。このイスラエルという名をつけられたのは神ご自身です。ですからこのように、イスラエルは初めは小さくとも、後に大いなるものとなるという神の約束が、その名前の中にも、神ご自身によって表されているのです。

## 2. 空

また「空の鳥が巣を作れるほどになります」とありますが、ここで「空」と訳されているヘブル語はシャーマイム(רִמְיָם)で、本来は神がおられる場所としての「天」を指し示す言葉です(創世記 1:1)。ですからこのたとえには、「天」におられた御方が「からし種」に住まいを設けられること、すなわち神の御子であるイエシュアが「からし種」の木に指し示されたイスラエルの中に住まわれることを表していると考えられます。まさにこう記されているとおりです。

### 【新改訳 2017】詩篇

132:13 【主】はシオンを選びそれをご自分の住まいとして望まれた。

132:14 「これはとこしえにわたしの安息の場所。ここにわたしは住む。わたしがそれを望んだから。」

「シオン」はイスラエルの首都、エルサレムの別称です。このように「神の国」とは、神の御子であるメシア、イエシュアがイスラエルの中心に「とこしえに」住まわれる状況、状態を指し示していると考えられます。聖書に記されているとおりに、十字架にかかれ、死んで三日目によみがえられたイエシュアは、天に上られて今日に至ります。ですからこのたとえは、未だ成就されていない、しかしやがて必ず実現する神のご計画です。この解き明かしを聞いて、信じて受け入れる者は幸いです。なぜならこれらの解き明かしは、最初に述べたように、イエシュアを信じ、救われ、やがて成就する「神の国」に、迎え入れられる者にのみ与えられる「神の国の奥義」と呼ぶべきものだからです。

## 3. 解き明かす

### 【新改訳 2017】マルコの福音書

4:33 イエスは、このような多くのたとえをもって、彼らの聞く力に応じてみことばを話された。

4:34 たとえを使わずに話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた。

「イエスは…聞く力に応じてみことばを話された」と訳されていますが、ここでイエシュアがなされたことは二つだけです。それはすなわち、「たとえ」を用いて御言葉を語り、そして弟子たちだけに「すべてのことを解き明かされた」ということです。この「解き明かす」という言葉の意味を、私たちは普通、隠された意味や、秘密を知ることと捉えてしまいがちですが、ヘブル語でこれをバーアル(בְּאֵר)と言い、本来はイスラエルの民に与えられた、神からの一つのみおしえを指し示した言葉です。

【新改訳 2017】申命記

- 1:5 ヨルダンの川向こう、モアブの地で、モーセは次のように、みおしえの確認を行うことにした。  
 1:6 私たちの神、【主】はホレブで私たちに告げられた。「あなたがたはこの山に十分長くどとまった。  
 1:7 あなたがたは向きを変えて出発せよ。そしてアモリ人の山地に、またそのすべての近隣の者たちの地、すなわち、アラバ、山地、シェフェラ、ネゲブ、海辺、カナン人の地、レバノン、さらにあの大河ユーフラテス川にまで行け。  
 1:8 見よ、わたしはその地をあなたがたの手に渡している。行け。その地を所有せよ。これは【主】があなたがたの父祖アブラハム、イサク、ヤコブに対して、彼らとその後の子孫に与えると誓った地である。」

イスラエルの民に対して「1:5…モーセは…みおしえの確認を行うことにした」という箇所、聖書で最初のバーアルが使われています。そしてその内容とは、神が「アブラハム、イサク、ヤコブに対して、彼らとその後の子孫に与えると誓った地」に「行け。その地を所有せよ」というものでした。ですからイエシュアが弟子たちに「すべてのことを解き明かされた」内容だけでなく、バーアル、「解き明かされた」という行為、その出来事自体に、イエシュアによって、神が「与えると誓った地」をイスラエルの民が所有するようになるという神のご計画が「型」として表されていると考えられます。

ちなみに神がイスラエルの民に「与えると誓った地」約束された地は、右の中東の地図の青い線で囲われたほぼ全ての地域と考えられていますが、現在のイスラエルは、そのわずかな赤い色の地域のみです。しかしやがてイエシュアが再びこの地上に来られるその時、神の誓いはついに果たされるのです。



このように、聖書に記された神のご計画とは、空想話でも象徴的、比喩的な話でもなく、聖書に記された字義通りに、私たちが今住んでいるこの地球上に、やがて必ず現実として起こる状況を指し示しています。かつてイエシュアが人の姿となってお生まれになったこと、そして十字架にかかって死なれ、三日目によみがえられ、天に上られたことが聖書のとおり、現実に起こった出来事であったのと同様に、イエシュアが再臨され、イスラエルを中心とした「神の国」、メシア王国とも千年王国とも呼ばれる世界統一国家をこの地上に建てられることもまた現実に起こるものであることを覚えましょう。その時は刻一刻と、確実に近づいているのです。